

各駅停車しか停まらない「中間駅」で、
しあわせなまちをつくるには（続報2）

～小田急線生田駅でのケーススタディより～

中西 菜穂子^{*1}（発表者） 竹中 薫^{*1} 高橋 祥^{*1} 大坂 岳史^{*1} 田村 高志^{*2}

^{*1} 株式会社ユー・アイズ・デザイン

^{*2} 株式会社小田急エージェンシー

要旨

本報告は、昨年「各駅停車しか停まらない『中間駅』で、しあわせなまちをつくるには」で報告した、多数の人が暮らしを営む街でありながら、マーケティングの対象となりにくい中間駅で、大規模な資本投入をせずとも、住民の生活満足度を上げ、沿線全体の価値を底上げする取り組みの、続報（3報告目）となる。

本年は、自律的なメソッドを構築することを目的とした研究活動を開始し、これまでの活動で得た知見から、大学生の教育プログラムとして試験的に実施した。問題解決型学習（Project Based Learning）を基本とし、プログラム前半では、デザイン思考を中心とした講義とミニワークショップ、その後チームごとに地域についての調査や活動コンセプトの作成を実施。プログラム後半では、チームごとに地域の中で活動していく中で生まれる障壁や停滞などを、定期的にフォローしていった。本報告では、各プログラムでの実践内容とその効果について報告する。また、コロナ禍でのまちづくり支援の方法として、リモートでのコミュニケーション方法や、対面でのイベントの実施中止時のチームフォロー方法も合わせて報告する。

キーワード

まちづくり デザイン思考 問題解決型学習(Project Based Learning)

背景

- 各駅停車しかとまらない「中間駅」は、都心への通勤者が生活を営む場所である。
- マーケティングの場としての注目度は低く、開発にむけた投資や調査もあまり行われない。

例：



上記は小田急電鉄小田原線の一部区間。黒い太文字の駅名が「中間駅」にあたる。多くは住宅地であり、乗降者数も多い。

目的

生活の拠点となる中間駅周辺で、住人自身が生活満足度を高める自律的なメソッドをつくる

1年目

中間駅の実態調査と、まちづくりに必要な要素の仮説作成

2年目

学生を対象とした仮説検証、プロセスの詳細化

3年目（本年）

まちづくりをテーマとしたPBL型教育のプログラムとして実証実験

研究内容のプログラム化

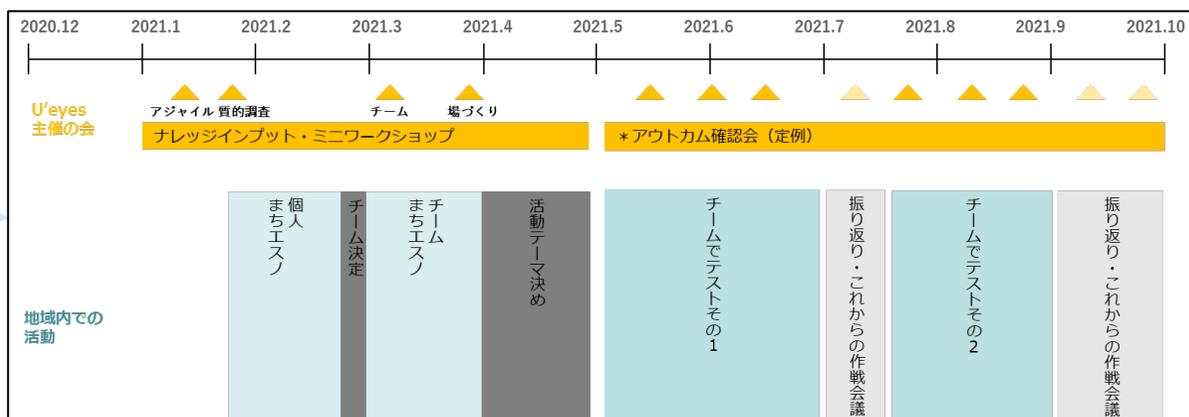
昨年までの研究結果をもとに、教育プログラム化するために必要な内容を検討した。

*アウトカム

提供者側ではなく、受益者にもたらされる成果であり、生活者視点で具体的に描いた、究極の目的・実現したい未来像。

		まちのアウトカム*がある	リーダーシップを出せる場がある	まちとのネットワークがある
昨年発表内容より	まちづくり活動に与える効果	<ul style="list-style-type: none"> 活動の実施に向けての推進力になる チーム内で活動の方向性がバラバラになることを防ぐ 	<ul style="list-style-type: none"> 活動が自律的に進むようになり、停滞しづらくなる 	<ul style="list-style-type: none"> 活動への使命感を生む まちのなかでの活動の認知度を上げる フィードバックの量や質を向上させる
昨年発表内容より	効果を強める方法	<ul style="list-style-type: none"> 個の暗黙知を言語化し、チームの認識としてとらえなおすこと 地域の利害関係とは離れたところでの議論を行うこと 	<ul style="list-style-type: none"> アウトカムに対して、個の興味関心や得意なところを活かし、作業分担ではなく役割として活動を分割すること *アウトカム自体の質に左右される 	<ul style="list-style-type: none"> 個々の関わりを広げたいという好奇心を、他者に妨げられないように支援すること 活動実施の際に、フィードバックを得られる仕組みを設計しておくこと
今年度	プログラム内容	<ul style="list-style-type: none"> 学生さんの思うまちのアウトカム*を具体化し、活動コンセプトを作成 活動中に随時活動コンセプトの再認識を促す 	<ul style="list-style-type: none"> チーム運営の自律化、ファシリテータ不関与で進める 定期的な進捗共有で、チーム内の進行をフォロー 	<ul style="list-style-type: none"> 事前にまちでの調査を実施 すでに地域で活動している人たちとのコラボレーションの促進

協力いただく学生たちと調整し、プログラムをスケジュール化



プログラムの実証実験概要

対象エリア：小田急電鉄小田原線 生田駅周辺

プログラム参加者：明治大学生田キャンパス建築学科山本研究室のB4,M1 計13名

(M1の学生4名は昨年度の活動にも参加)

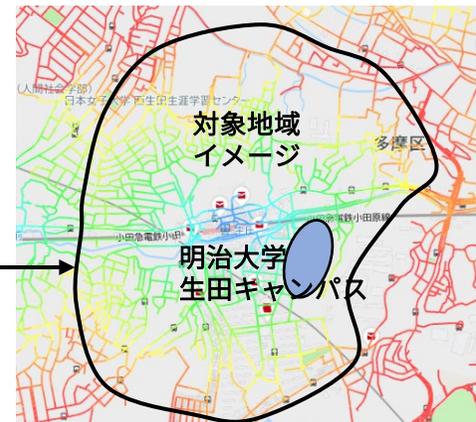
プログラム運営者：U'eyes Designスタッフ 計3名

生田駅より徒歩15分圏内をメイン対象地域とする
下記図の青～オレンジまでが徒歩15分圏内。



神奈川県川崎市多摩区

新宿駅より約20分
各駅停車のみ停車



参考データ：<https://s3-ap-northeast-1.amazonaws.com/naraemongmaps/index.html#15/35.6179/139.5432>

進行形式：オンラインによる参加者・運営者の共有ミーティングと、オンサイトでのチーム別の地域活動

利用ツール：zoom 全体でのリアルタイムコミュニケーション

Trello 個人、チームの進捗の集積と、日程調整など連絡のやり取り

miro ワークショップなどでの共同編集作業、不参加者へのフォロー

メール 運営者と参加者の個別のやり取り

チームごとの活動をメインに。なるべく参加者の自律的な学びの場になることを目指す。

プログラム実施と結果① インプット会とミニワークショップ

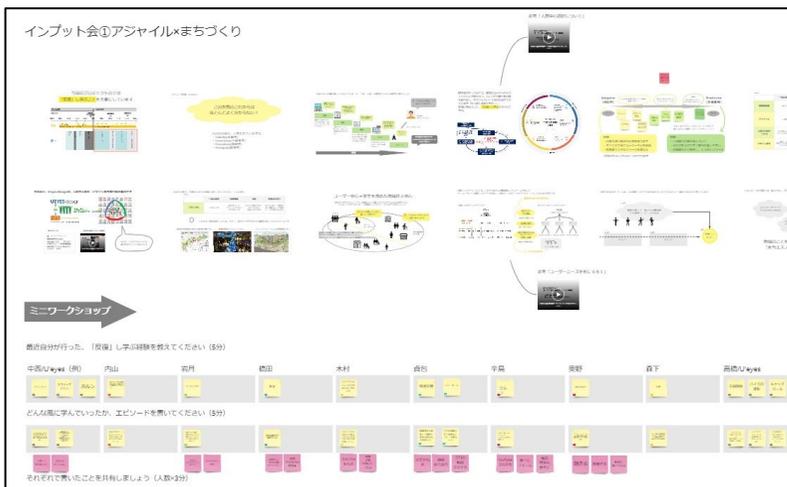


目的

- まちの中での活動を実施するにあたり、必要なマインドセットや知見を身に着ける。
- 自分たちでチームを運営できるように、チームビルドをサポートする。

実施内容

- 30分間の運営者からの講座と、関連する内容の30分のミニワークショップをセットで、オンラインにて計4回実施。
- 運営者がインプット内容やワーク内容の設計・進行を行った。
- 日程が合わない参加者向けに、講座及びワークショップの実施時のzoom録画やmiroでのワーク内容の共有を行った。



インプット会・ミニワークショップ時のmiro例

題目	目的	インプット内容
1 アジャイル×まちづくり	小さく現場で試すことの意義の理解	<ul style="list-style-type: none"> • デザイン思考やアジャイル開発の紹介 • 実験計画の立て方、フィードバックの得方など
2 質的調査	地域から学ぶ方法を取得	<ul style="list-style-type: none"> • まちエスノや、まちでの活動をするうえでより良くフィードバックを得、発見につなげる手法・マインドセット
3 チームと役割	アジャイルに適したチームのあり方の理解	<ul style="list-style-type: none"> • Innovative Organization Treeの紹介 • アウトカムと活動コンセプトの考え方 • チームの中での役割の持ち方
4 場づくり	チームの中・外での場の種類と作り方についての理解	<ul style="list-style-type: none"> • 場の種類と特徴 • アイデア発散と収束の手法 • ファシリテーション手法

結果

- インプット内容をベースに、各参加者の発想を促すことで、まちでの活動のイメージを膨らませてもらった。
- 参加者、運営者の双方の関係性構築の機会となった。
- チームにおける「活動コンセプト」の意義と、その作り方について、詳細まで理解を促すことができた。

プログラム実施と結果② まちエスノ

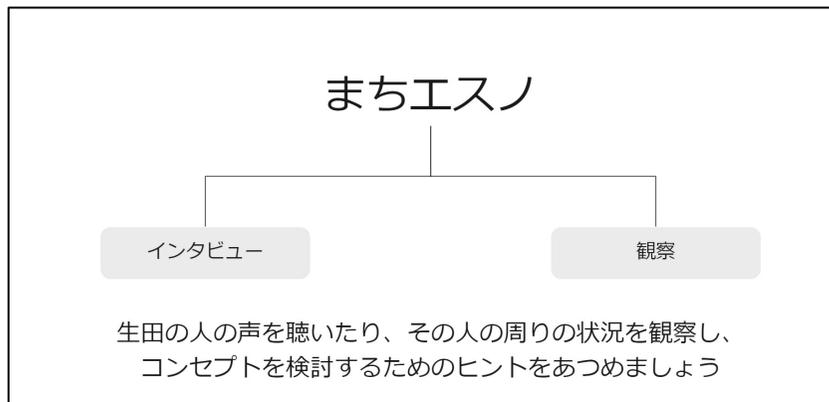


目的

- まちのことを自分事としてとらえられるようになる。

実施内容

- 新しく参加した学生に、各人で地域でインタビューと観察をメインとした調査を行ってもらう。
- コロナ禍で実地での調査が難しい場合、デスクリサーチやオンラインでの調査も可とした。
- 調査した内容は、Trelloにアップしてもらい、ミニワークショップ時にも共有・議論の場をつくった。
- チーム作成後も、追加で気になることがあれば、チームで調査を行ってもらった。



Trelloでの各自の調査結果の共有

前項のインプット会②「質的調査」にて、まちエスノに関連して地域の中での調査方法をレクチャー

結果

- 大学以外に地域のことを知らなかった学生も、地域を歩き、改めて気づきを得る機会となった。
- 参加者によって調査方法が異なり、地域の理解度・共感度に差ができてしまった。インタビューはできなかった人が多かった。
- 調査を通じて、個人が地域の中で**興味関心を持っている部分が具体化**された。

プログラム実施と結果③ チーム分け・活動コンセプト決め



目的

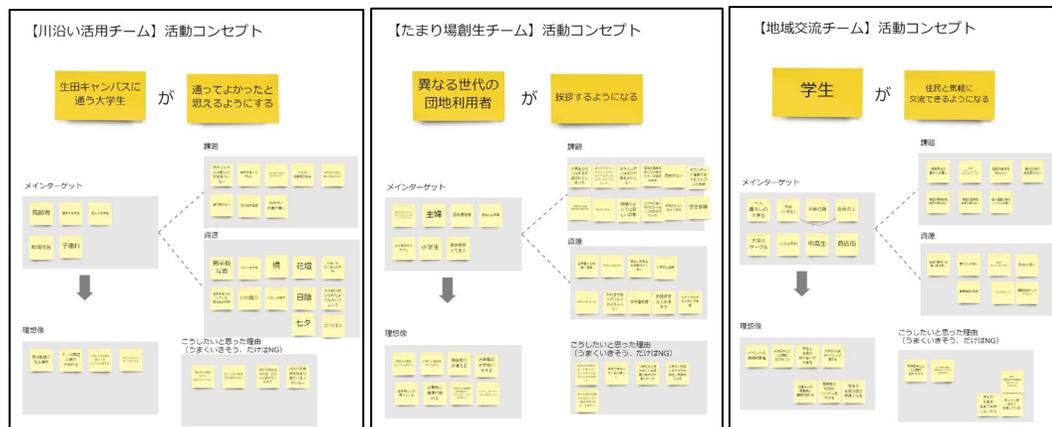
- チームごとに活動が運営できるように、チーム内でのファシリテーションの意識を身に着ける。
- 個人の興味関心を基本に、チームで共有するアウトカムをイメージし、活動コンセプトとして具体化する。

実施内容

- まちエスノで得た情報をベースに、自分の興味関心を共有してもらう。
- 共有した内容を運営者でグルーピングし、各参加者に自分の興味のあるグループを選んでもらう。
- 人数が3名以上になるように、チームを作成する。(人数によってはグループを合体する場合もあり)
- チームごとに、チームの活動コンセプトを作成し、発表を行う。



まちエスノでの気づきのグルーピングと、参加者のグループ選択 (★マーク) の様子



計3チームになり、各チームごとに、活動コンセプトを運営者側が作成したフレームに従い、話し合った内容を記載してもらう

結果

- 個人の興味を共有した上でチーム活動に移れたので、**チームごとの議論の焦点が絞れ**、話し合いがスムーズに始められていた。
- チームごとの活動コンセプトを決めるために、再度地域を違う視点で調査する機会が生まれていた。

プログラム実施と結果④-1 チーム運営（活動支援）



目的

- 参加者が、彼らの活動コンセプトに合わせて、自律的に地域の中で活動が維持できるように支援する。

実施内容

- チーム間や、運営メンバーとの情報共有は、Trelloと、2-3週間に一度のオンラインでの定期共有会の場で実施。
- 各チームの活動の中で、運営メンバーの介入が必要になった場合は、各チームメンバーと運営者で個別相談会をオンラインで実施。

チームでの活動			
各チームに下表の係を設定してもらった上で、活動を行ってもらった。			
	チームケア係	進捗管理係	地域発信係
確認点	チームの環境（アウトカム、多様性、心理的安全性）が良好か	個人の行動（好奇心、失敗に向き合える、自己の変容）が良好か	チームと地域との関係性が良好か、活動が地域に受け入れられるか
働き	個人個人の負担感、活動への納得感などへ気を配り、困ったことがあったときに手を挙げる役。	チームの中でスケジュールを決め、やるべきことを棚卸し、個人・チームでの活動を明確にする。	地域の関わる人たちへ、自分たちの活動概要や、コンセプトを伝えられるように準備する。

- チーム間での情報共有の場
- Trelloでは発露しづらい困りごとの相談

- チーム内でのコミュニケーション支援
- アイデア発散・収束の支援

定期共有会

- チームケア係と運営者が中心となり実施する
- 各チームから、直近の活動や、それに関連する興味関心の変化を報告
- 運営者や他チームからコメントや質問を実施する

個別相談会

- 運営メンバーが、一つのチームの話し合いの場に入り、ファシリテーションを行う
- 運営者も一緒に活動内容のアイデアを出す

結果

- チーム内での役割として、「チームケア係」になったメンバーとは、運営者もコミュニケーションがとりやすかったが、それ以外のメンバーが、**チーム内でどのように考えて活動してるか、どのように役割を果たしているかは把握しきれなかった。**
- 自分のチーム以外から学ぶという機会が少なく、チームと運営者の関係性に閉じてしまいがちになった。

プログラム実施と結果④-2 チーム活動（具体的な地域活動）



目的

- 地域の中でトライ＆エラーを繰り返しながら、活動コンセプトをかなえられる取り組みに近づける

実施内容

- チームごとの活動内容やプロセスの検討は、チームメンバーが主体となって、行ってもらうため、コミュニケーション方法や利用ツールなども、各チームにお任せした。

	「川沿い活用」チーム 現B4:3名 経験者不在の少人数チーム	「たまり場創生」チーム 現B4:3名 現M1:2名 メンバーの活動量の偏りが大きい	「地域交流」チーム 現B4 3名 現M1:2名 中心となり動くメンバーがいる
4 5 月	<ul style="list-style-type: none"> 川沿いでできることをアイデア発想 学生の意向としてまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> 団地居住者との交流 団地そばのみたまもりカフェに足を運ぶ 	<ul style="list-style-type: none"> 子供を対象としたイベントを実施することに焦点化 子ども文化センターとコンタクト 
6 7 月	<ul style="list-style-type: none"> 自治会長さんとコンタクト 地区の七夕祭りのサポート（竹設置等） 学校の先生とのつながりもできる 	<ul style="list-style-type: none"> みたまもりカフェ主催にてイベント参加（テーブル茶道教室、バザー） 参加者にヒアリング 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども文化センターでのイベントを企画 施設のかたや大学と、企画書などのやり取り 
8 月以降	<ul style="list-style-type: none"> 自治会や学校との活動を予定するも、コロナで立ち消えに 	<ul style="list-style-type: none"> 上記カフェにてイベント企画するが、コロナで立ち消えに 	<ul style="list-style-type: none"> コロナの波を待ち、防災をテーマにしたイベントを10月17日に開催予定 

結果

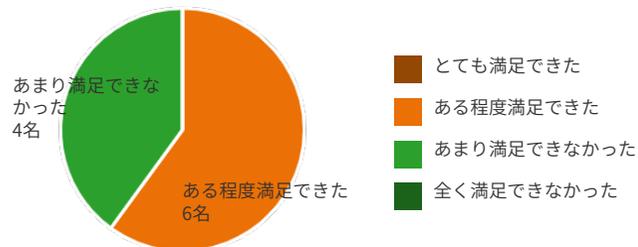
- チームごとの活動頻度としては、日々のLINEなどでのチャットと、月一程度の活動やミーティングが行われる程度であった。
- 地域の人たちと自分たちで**つながりをつくった**ことをきっかけに、活動へのモチベーションが向上した。
- 既存の地域活動家と交流することで、**活動目的の自律性が弱まる**（ぶらさがり）現象もみられた。
- コロナ禍で、自分たちの計画していたイベント等が思い通りに実行できないこともあった。

参加者からのフィードバック

参加者に対して活動終盤となる10月にアンケートを実施し、本プログラムへの意見を収集した。（回答数10）

活動への満足度

Q、活動全体を振り返って、満足度はいかがでしたか。



上記の満足度に繋がった要因

+ 地域の再発見につながった

「イベント開催にむけて、地域の人と交流ができ、このプロジェクトに参加しなければ到底感じる事のなかった“生田の魅力”を感じることができた。」

+ 地域とのつながりのきっかけづくり

「生田の店舗をほとんど知ることが出来た。街に居場所ができた。」「身近でありながら、かかわったことのない人の話を聞くことができた」

+ まちづくり活動の経験を積めた

「自分たちがアクションして、地域の人とのつながりや交流を実践的に動けた」「地域のイベントに参加して、どのように地域活性化を行っているのか、また住人に対しどのように活動をアピールしていくかを学んだ」

± コロナと付き合う前提での活動規模だった

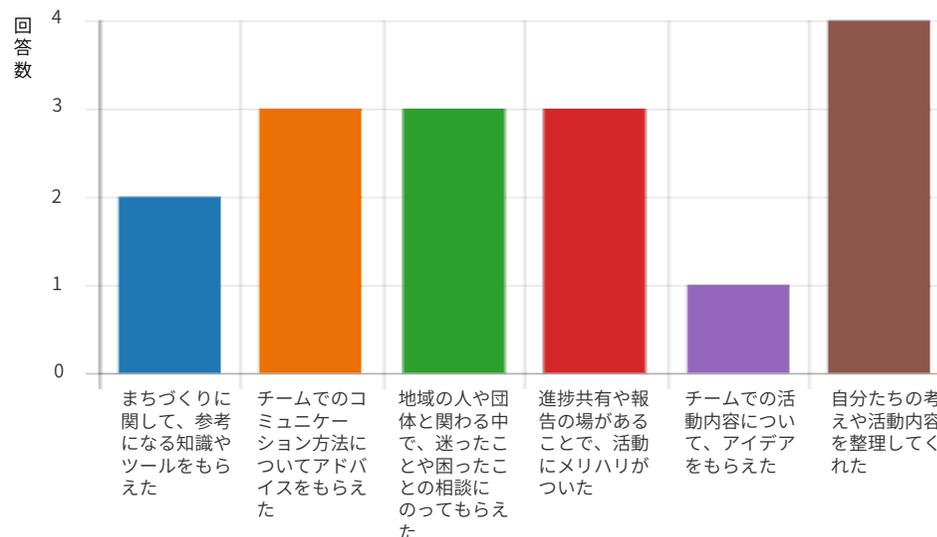
「どうせ緊急事態開けないだろうというマインドで、コロナありきで進められた」「余裕を持ったスケジュールにすることで、元々掲げていた活動コンセプトと比較すると、実際の活動の規模がとても小さくなってしまったというジレンマもあった」

- 地域との直接的な関わり不足

「地域の人や企業の方と繋がりが全然もてない」

運営者への満足度

Q、活動を通して、U'eyesDesignのサポートとして役に立ったものを、全て選んでください。



運営者へのコメント

・オフラインでの関わりが欲しい

「U`eyesの方々と対面等で話してそちらの意見を知る機会が欲しい。」

・地域や企業とのつなぎ手になってほしい

「U`eyesが持っている企業や事業主とのコネクションから、プロジェクトの拡大や関係性の構築を図りたい。」「地域と繋がる場を設けてくれたり、具体的な内容の提案、FB」

・運営者との窓口となる学生を決めてほしい

「メンバーが多すぎて、責任感が誰ももてない状況。（チームごとのつなぎ役の、さらにまとめ役として、）誰かひとり一番上の学年がU`eyesとこまめに連絡とって、学生さんへ情報を落としていく形がよい。」

全体考察

- 元々地域と関わりが少なかったがゆえに、地域の調査を数回行ったとしても、彼らが作った活動コンセプト自体への思い入れが少ない。それゆえ、活動を進める上で、活動コンセプトを叶えることよりも、直近でつながりができた人の手伝いをしたい、という気持ちの方が強くなることは、自然なことであると考えられる。
- 様々な活動アイデアを発散することはできても、収束が難しかった印象がある。活動コンセプトを決める上で、参加者たちの持つ特徴やスキルの棚卸が不十分であり、自分たちが活動する強みや必然性を持つことが難しかったからではないかと推測される。
- 地域の中でイベントを起こしたり、必要な団体や施設と関わりをつくったりするような、具体的な地域活動の経験が運営者メンバー側も少なく、参加者の活動の詳細へのサポートは欠如していたと考えられる。
- チームの自律性を重要視するあまり、内部の状態が把握しきれなかった。チームのあり方についての講義はしたものの、日々の個々人の役割や立ち回りなどのコーチングが不十分であった。

今後の展望

- 本プログラムの精査をし、より参加者にとって学びになり、より地域に影響を与える活動を生み出せるような内容に修正する。
- 本プログラム参加者のうち、今後も地域との関わりの意向がある学生が、プログラム終了後も継続的な地域との関わりができるように支援する。
- 参加者が学生であるという特徴を考慮し、先輩から後輩へ受け継いでいくような仕組みを検討する。
- 本プログラムをより普遍的に、様々な地域、参加者に実施できるものにするための協力者と接点を持ち、コラボレーションする。
 - ▶ 大規模開発の対象にならないような地域のまちづくり・都市開発に関わっている方
 - ▶ 自律的な活動をテーマとしたPBL型教育の設計等にご経験のある方
 - ▶ オンラインでのまちづくりや、つながりづくりに知見がある方
 - ▶ イベントの企画・運営等に知見がある方

本取り組みの詳細については、11月4日（木）実施の、オンライン無料セミナーで別途紹介予定です。
セミナー概要・参加申し込みは、<https://ued-online211104.peatix.com/view>にて。